母子相互作用の発達心理学的研究

小　嶋　謙四郎（早稲田大学）

総　括　報　告

この研究の目的は，乳児期の母子相互作用が，小児のパーソナリティの発達と健康の保持に果す役割をあきらかにし，その研究成果を発達障害の予防，早期発見，早期指導の理念や施策に反映させ，乳幼児保健指導の指針作成に活用させることにある。

われわれは，昭和37年以来，保健所の３歳児健診システムとして，プレイルームと母子相互作用を活用した幼児相談をおこなっている。

そこで，川崎市中原保健所，同市高津保健所，東京都新宿保健所の幼児相談のなかから，「言語発達遅滞」を主訴とするケースの年度別推移，来所児数に占める言語発達遅滞の割合，男女の比率，経過，を整理し，その結果，45年４月から55年３月の10年間の間に，各保健所とも，言語発達遅滞児の，３歳児健診来所数に占める割合が，１％をこえること，また，女児よりも男児により多いこと，相談受付後，１年11カ月未満で，85％以上が，好転終結していることなどの共通点が見出された。

また，発達遅滞の相談，観察記録をもとに，運動，探索・操作，社会，習慣，言語の各領域の遅滞のプロフィールを，津守・稲毛法によって吟味した結果，発達遅滞領域の拡がりの度合によって，Ⅰ群から，Ⅴ群に分類することができた。これらⅠ群から，Ⅴ群に分類することができた。これらの群は，乳児期の，母の就労，既往疾患の有無，娠時の異常の各項目において，分布に有意の差がみとめられた。

これらのケース資料の分析と，その間の臨床経験から，探索・アタッチメント・バランスの発達を，正常と異常の判定基準とすることが妥当であるというみとおしを得たので，３歳児健診時までの，乳幼児保健指導の，指導理論として，母子相互作用仮説による発達段階，遊具とのとりくみ行動による発達評価，母子関係の発達評価の基準案，正常と異常の臨床型と，その発達臨床仮説を作成した。

また，この研究とパラレルに，1）母子のアタッチメント関係の評定法として，エインズワースらのストレンジ場面法のわが国における適用の有効性について，2）アタッチメント形成初期の母子相互作用について，3）オーバーアタッチメントの幼児の分離　自立について，それぞれ協力者に研究を依頼し，所期の成果をあげることができた。

今後は，ＶＴＲの装置を活用して，プレイルームにおける小児の行動分析を，より詳細におこない，発達指導基準案をより改善し，指導指針に資するつもりである。

文　　献

1. 小嶋謙四郎　1981. 乳児期の母子関係　医学書院
2. 繁多進，ほか　1982. アタッチメントパタンの安定性　母子研究　No.5. 社会福祉研究所。
3. 大藪泰，ほか 1980. 乳児の行動状態に関する研究　小児保健研究 vol. 40.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

この研究の目的は,乳児期の母子相互作用が,小児のパーソナリティの発達と健康の保持に果す役割をあきらかにし,その研究成果を発達障害の予防,早期発見,早期指導の理念や施策に反映させ,乳幼児保健指導の指針作成に活用させることにある。